

棚田嘉十郎関係資料の寄贈

平城宮跡保存運動の先覚者、棚田嘉十郎（1860年～1921年）関係の資料が奈文研に寄贈されました。嘉十郎の遺品など計20点です。これらは嘉十郎の死後、ご子孫によって大切に保管されてきましたが、このたび嘉十郎の孫の妻とその子にあたる棚田てる子氏・棚田正彦氏より、平城宮跡に関わりの深い奈文研に寄贈していただくこととなったものです。

棚田嘉十郎は奈良で植木職人をしていましたが、明治～大正時代、平城宮跡の重要性を訴え、第二次大極殿・朝堂院地域の保存運動には中心となって奔走しました。しかしその過程でのトラブルから自死



棚田嘉十郎翁遺影（寄贈資料より）

したという、まさに生命を平城宮跡保存に捧げた人物です。今回寄贈された資料は、嘉十郎の人柄・保存運動の実態を知ることができます。今後、奈文研で大切に保管・活用していきます。

（文化遺産研究部）

発掘調査の概要

朝集殿院南門の調査（平城第326次）

平城宮跡の壬生門の北側には、朝集殿院という区画があると考えられています。この区画はまだ部分的にしか発掘調査が及んでいないことから、奈良文化財研究所では、今後数年をかけて朝集殿院地域の発掘調査を計画しています。初年度は、朝集殿院の南門の存在を確認することを目的として2002年1月から発掘調査を開始しました。調査面積は約1050m²です。

南門は後世の削平により、基壇上部はほとんど残っていませんでした。しかし、基壇を造る際、地面に穴を掘り、土を層状につき固めて強固な地盤にする「掘込地業」と、基壇外縁に敷く化粧石である「地

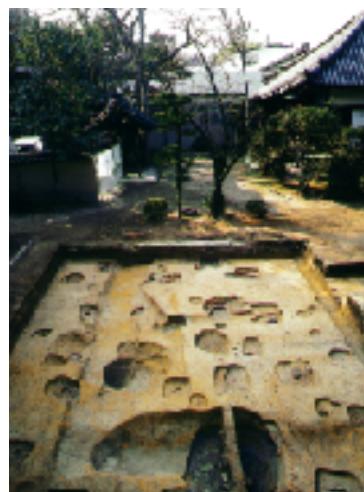
覆石」の抜取痕跡が検出できました。その結果、基壇の大きさと位置がわかり、第二次大極殿院南門とほぼ同規模であることが判明しました。そのほか、南門の北側で朝集殿院内の遺構もみつかっています。今後は、北側の朝堂院にみられるような下層の掘立柱建物があるかどうかなど、遺構の確認調査を中心に、3月末までの予定で調査をつづけます。



朝集殿院発掘現場（北東から）

西大寺法寿院の調査（平城第341次）

西大寺法寿院の庫裡改築にともなう事前調査を2002年1～2月に実施しました。調査区は東西8m、南北7mで、北側の一部に張り出しを設けました。予想に反して後世の攪乱が少なく、黄白色砂質土の地山が地表下30cmで現れ、この面で遺構を検出しました。遺構は大きく奈良時代と江戸時代以降に分かれます。奈良時代では、西大寺造営前の平城京右京一条三坊六坪の西北隅部における宅地の掘立柱建物や塀が3時期あることを確認しました。柱穴の大きさは一辺が70cm前後。江戸時代以降の遺構は井戸と溝などです。



法寿院発掘現場（東から）

西大寺四王堂の調査（平城第342次）

西大寺四王堂の西側放水銃移設にともなう事前調

査を2002年2~3月に実施しました。調査区は北区15m²と南区2m²を設けました。北区では奈良時代の四王堂創建時の西北隅の掘立柱穴を検出しました。柱穴は一辺が2m以上と巨大です。柱を抜

き取った後、ほぼ重複した位置に礎石を据えた礎石据付穴を確認しました。基壇には平安時代の瓦積み外装が残り、西大寺創建時から平安時代までの瓦のほか、凝灰岩や川原石も用いられています。創建時の建物や基壇の規模を踏襲して、平安時代に礎石建物へと造り替えたと推定されます。創建時の四王堂は過去の調査とあわせると、東西が約32.5m、ほぼ11丈となり、西大寺に伝わる資財帳の記載に一致します。南区では地表下30cmが地山で、くぼみをいくつか検出したのみです。

(平城宮跡発掘調査部)



四王堂発掘現場（北西から）

藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第117次）

大極殿院の東面回廊などを対象とした南区につづき、去年の12月からは、大極殿東方に建つ「東殿」を対象とした北区の調査にはいっています。

この部分は、もとの鳴公小学校・幼稚園の敷地にあたり、それにともなう攪乱を受けています。そのため、遺構の残りはありません。しかし、約60年前に日本古文化研究所が壺掘り調査した成果を、あらためて見直さなければならぬ多くの知見が得られつつあります。

まず、大極殿院回廊は、従来、「東殿」以北が単



大極殿院「東殿」と大極殿土壙（東から）

廊（梁行の柱間が1間）と復元されていましたが、「東殿」以南と同じく、複廊（梁行の柱間が2間）であることがほぼ確実となりました。

そして、「東殿」についても、これまで桁行7間、梁行4間と復元されていましたが、少なくとも梁行については、それよりかなり小さくなることが判明しつつあります。今後、「東殿」の性格についても再検討が必要となりそうです。

細部では何かと疑問点が多かった藤原宮大極殿院の構造を、より整理されたかたちでご報告できる日も近いでしょう。

藤原宮東南官衙地区の調査（飛鳥藤原第118次）

2001年10月末から2002年2月までおこなった、高所寺池という溜池の堤防改修工事にともなう調査です。池の東・北・西の三面を、総延長200m、およそ2000m²にわたって発掘しました。調査区は、藤原宮の南面大垣と内外の濠を含み、「東南官衙地区」とよんでいる区域にあたります。

調査にはいってまもなく、大垣とその南北に濠がみつかりました。藤原宮の大垣は、掘立柱を土壁でつなぎ、瓦葺きの屋根をのせた構造です。ただ、大垣と内濠はほぼ想定位置で発見されたのですが、外濠は想定位置よりも7m大垣寄りにありました。

調査区には、宮内先行条坊とよばれる藤原京の街路の一つ、東二坊坊間路がとおっています。普通、藤原宮の施設はこの先行条坊の側溝を埋め立てて造営されているのですが、南面の外濠は側溝と一時期共存しており、側溝を流れる水が外濠に注ぎ込むように掘り直されていました。まず、排水体系をつくり、そののち側溝をうめて大垣の柱をたてたり内濠を掘削していたのです。外濠の位置だけが想定位置とずれた理由も、このあたりにありそうです。

大垣の北側、つまり宮の内側では、役所の建物や



藤原宮南面の外濠（西から）